

Title	香港粵語単音節高昇り常変調食物名詞字の，多音節名詞における変調状況
Author(s)	張，淑儀
Citation	大阪外国語大学論集. 34 p.1-p.19
Issue Date	2007-03-09
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79994">https://hdl.handle.net/11094/79994</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 香港粵語単音節高昇り常変調食物名詞字の、 多音節名詞における変調状況

張 淑 儀

### An Analysis on Tone Sandhi in Polysyllabic Cantonese Nouns : The tonal change behaviour of monosyllabic food nouns usually pronounced in high-rising changed tone

CHEUNG Shuk Yee

#### Abstract

Many linguists, in their discussions on Cantonese Tone Sandhi, are in the opinion that the high rising changed tone usually occurs in the last character (i.e. syllable) in polysyllabic nouns. This paper attempts to examine this common theory by studying a list of polysyllabic nouns containing monosyllabic food nouns that are usually pronounced in the high rising changed tone in colloquial speech.

In comparing and analyzing the positions of each monosyllabic noun character in the different words compiled and their Tone Sandhi behaviour, we can come to the following conclusion. The tonal change tendency of the monosyllabic noun itself and the significance of its original meaning and form within the polysyllabic word can be considered as two other crucial factors in determining the occurrence of the high rising changed tone.

#### I. 高昇り変調名詞についての先行研究

一般に広東語とよばれる粵語は各面で古漢語との対応や保存の関係が比較的是っきりしている方言であり、語彙も漢語系が大部分をしめる。しかし、もともと口語として発展してきたものであって、漢字本来固有の、現代粵語としての正音も、いまの話しことばで変音するものがあるし、声調も「変調」(部分的声調交替ともいえる)することがある。

変調には主要な条件が音韻的なもの、語法的なものもあるが、ここで対象としているのは品詞性のちがいをもふくみつつも語彙的なものである。粵語で最もよく見られる変調は低・中音域声調からの高音域昇り調への変調であり、中国語で「高昇變調」とよばれることもあり、筆者は高昇り変調とよんでいる<sup>(1)</sup>。

高昇り変調についてはまず Ball 1907 : 26 が “familiar words” (身近かな単語—筆者注、

以下も）と言及しつつ、いくつかの原声調からの変調の多寡を“often”（しばしば）、“occasionally”（ときに）など頻度副詞をもちいて形容しながら紹介した。Chao 1947: 34-36 も、“familiar thing …”（常用される身近かなもの等）という説明のほか、さらに共通語における r 化の機能との類似をも指摘した。以来、各家が多くの語彙例を紹介し、品詞性や語義の分化などを指摘するものもある<sup>(2)</sup>。が、ほとんどが異口同音に述べているのは、これは名詞に多く現われる習慣であるほか、変調する字の位置についてはほとんど多音節名詞の最後の一音節だという点である。近くは Bauer 1997: 231-233 も多くの語彙をあつめるなかで、似通った意見をもちながら、ただそうとも限らないという疑問といくつかの反例をあげた<sup>(3)</sup>。ほかに、Tsou 1994: 542- はまた、社会言語学的な角度からいくつかの時間的変化をふくむ例とともに新しい概念要素を提唱し、より上位にくるであろう“agreeability”（可受性）が、“familiarity”（親近性）とさらに“accessibility”（常見性）といった要素とともに関係しているのではないかと示唆したが、とくに変調字の位置関係などについては言及していない。

これらの研究はおもに多音節名詞を中心とした変調の語彙例を集め、そしてその範囲から個別あるいは全体の傾向をまとめ、たしかに高昇り変調の理解に大きな貢献をしている。しかし、この変調現象はまだよく、また全面的に説明されてはいない。

そこで筆者は過去数年間、まずもっぱら、より基本的とかがえる単音節名詞の高昇り変調について、基礎的、網羅的に調査をし、分析をおこなった。

そこでは、これまで粵語口語の単語認定を明確にした全面的な単音節の語彙集がないため、まずはできるだけ全面的に粵語口語の漢語系単音節名詞をあつめた。その方法としては、標準的な同音「字」表二種：黄錫凌 1983（1979 修，1941 初）と千島英一 1996（1991 初）に基づき、語彙の高昇り変調のない陰平 = 1 声，陰上 = 2 声，陰入 = 7=1 声以外の声調のすべての「漢字」から一字ずつ検討した結果、計 391 個の口語単音節名詞字をとりだした。

そしてその字が単音節名詞として使われるときの声調を原調からの変調と不変調にわけた。また、変調を常変調類と変不変調併存類にわけ、そのうち変不変調併存類を、変調が弁別機能をもつものと弁別機能をもたないものに分類し、さらに弁別の種類を特化と分別にわけ、そのうち特化の種類をなお三つにわけつぎのように分類した。

【 変調 [ 常変調・変不変調併存 { 弁別性 ( 特化 〈 3 種 〉・分別)・非弁別性} ]・不変調 】

そして、この変不変調種類別に語彙表をつくり、各類に属する字数と比率をも調べた。

また、上の変調をもたらし条件をさぐっていくため、音韻的、語義的両要素から考察を試みた。入声をふくむ各原声調や韻母、声母など、各共時的音韻的特徴別の変調率を調べ、原声調については数字データでかなり有意味とおもわれる差異を確認した。また上のように分類した各変調不変調類名詞を語義によって分類し、一方、各語義類からみた各変不変調状況の比率を調べ、語義類による変調の優先度らしいものがあることを提示した。そして、おもに語義的な生活密着性と同音衝突回避から変不変調を説明し、その他の例につい

ては現地の社会文化的価値概念とその語彙や音通忌避など、個別的条件を補足して解釈を試みた<sup>(4)</sup>。

今後はそれらを基礎として多音節（二音節以上）名詞の変調状況の調査と分析にもとりかかってみたい。

## II. 対象範囲と目的, 手法

きわめて多数で、広範囲にわたる多音節名詞の高昇り変調について段階的に理解していくため、今回の調査分析はまず、以前に調べ、分類した常変調の単音節名詞字のなかで、しかも語義類別が食物類に属する名詞字をふくむ多音節名詞についておこなった。これらの多音節名詞のなかの、当該食物名詞字の変調の有無を調べ、その単字の変不変調の条件、規則について探ろうとするものである。

今回、食物という語義類別を選んだ理由は、筆者の単音節名詞の変調研究では、生活密着性がきわめて高い食物名詞は、変調との関係がつよく、さらに具体的にいえば、つぎのような点があるからである。

- ① 各語義類別名詞字のうちでその常変調字の占める比率を見ると、食物名詞類が最も高く（28字中13字で46.4%）、
- ② 全常変調名詞のうち、その常変調食物名詞字の字数自身（13個）も（各語義類別の変調字数のなかで、用品・工具の17個について）第二位を占める。
- ③ 常変調の食物名詞字をふくみ、多くの人によく使われる多音節名詞はかなり豊富にある。

もちろん、この食物名詞字という語義類別内での結果が多音節名詞全体の変調理解にそのまますべて有効だと予断をもっているわけではないが、上のような条件からみて、その重要な一部分であり、単音節名詞を調査したのち、膨大な多音節名詞の全容をみていく手はじめとして格好の材料と考えたわけである。

そこで、上記の筆者の調査では、常変調する単音節食物名詞字はつぎの13個であった：

橙 柚 梨 李 柿 桃 欖 豆 糰(粽) 餡 蛋 魚 螺

さて、小稿では、とくに上述のように、諸家による先行研究の「変調する字の位置についてはほとんど多音節名詞の最後の一音節である」という点に疑問をもったため、位置の違いに着目して調査を組み立てた。また、今回は名詞字の語義範囲を食物類と限定しながらも、そのなかではやはり、比較的に全面的な調査をし、分析を試みようとした。

変調状況の調査、判定に関しては、以前の単音節語の調査のさいは、香港粵語を母語として三、四十年生活してきた筆者自身の発音の習慣で判断した。なぜなら、その回の調査は常用しない漢字が多数ならんだ同字「字」表にもとづいて、単語認定と連動しておこな

ったためもあり、適当な母語話者の協力者が得にくく、そのうえ単音節語では個人差が比較的小さいとも経験的にもおわれたからである。

ところで、今回の食物名詞字をふくむ多音節語は生活中で使用されるものが多く、大多数の人が使い、あるいは知っている語彙である。また他方、これら多数の語彙は非常に具体的で、かなり社会的な要素による声調発音の個人差が、単音節の場合より多いと経験的に予測された。このさい、以前から意識し、Tsou も示唆した社会言語学的差異をもしだいに視野にいれてゆきたいと考えた。そして、今回若干数の母語話者の協力をえられる機会にめぐまれたため、この変不変調状況の調査は、基本的に、それら若干数の母語協力者の判定に基づいておこなうことにした<sup>(5)</sup>。

### Ⅲ. 調査の具体的方法

1. 常変調単音節食物名詞字の、多音節名詞のなかでの変調状況を調査するため、まずこれら単字をふくむ多音節のおもに日常食物名詞と、その周辺の名詞（たとえば、桃樹、蛋白質、美人魚（にんぎょ）、金魚（きんぎょ）など）を、つぎのような材料源によってあつめた。

- a. 文献関係の資料： 高昇り変調の先行研究における食物名詞の例のほか、広東語の辞典、語彙集、教科書、参考書類、また飲食・食品辞典など
- b. 粵語を母語として香港に在住し、口語が比較的熟しているとおもわれる四十歳代を中心として、十代から七十代まで各世代男女の調査協力者二十数名から提供された食物名詞など
- c. 香港の食品市場（いちば）や外食店であつめた食物名詞

そののち、使用頻度が非常に低い、あるいは重複性がつよいとおもわれるものなど若干を取り除き、合計 460 個余りを得た。なお、後段で個別にこれらと比較分析するため、常用の非食物多音節名詞も若干あつめた。

しかし、品種名、もともと地域・商標名等の由来を冠した呼び名なども、普通の意識で常用されるようになっているものは排除しなかった。

2. 上述のように、先行研究では、ほとんど多音節名詞の最後の一音節の変調が強調されていたところであるが、今回は、常変調食物名詞字の位置と変調の関係をよく観察したいと考えた。位置とはいっても、多音節複合語の場合、その語構成も関係するとおもわれ、やがて言及することになろうが、当初からの複雑化をさけて、ひとまずは語構成にかかわらず、頭字、中間、後尾（あとの表で斜体で表示）の三位置に分けて整理した。
3. そして、これらの多音節語彙のなかで、頭字、中間、後尾各位置にくる当該の常変調食物名詞単字が変調して使われるかどうかを、調査した。

具体的には、上 1 の b のうち 20 名<sup>(6)</sup>に対して当該多音節語彙表を示し、日常生活で話す場合、対象字が変調するかどうかを問うアンケート調査をおこなった。

#### IV. 調査結果と分類

各多音節語における対象字の変不変調判定は、各調査協力者の回答資料で予想以上にばらつきがあり、一致度が多様であった。そこで全体を概観して、当面三分の二をさらに若干上回る70%をひとつの目安として、それ以上をここで大部分とよび、それをふくめてつぎの5段階にわけた。そして後の表中でもそれをすべての当該字について、それぞれ下右に示したような文字装飾で区別して表示した：

対象字について、

- ・全回答者（20人）が一致して変調とするもの：字（二重下線で表示）
- ・大部分（70%つまり14人以上）の回答者が変調とするもの：字（一重下線で表示）
- ・変調あるいは不変調とする回答者の差が小さく、ともに70%未満のもの：字（点線下線で表示）
- ・大部分（70%つまり14人以上）の回答者が不変調とするもの：字（網掛けで表示）
- ・全回答者が一致して不変調とするもの：**字**（太字で表示）

その結果、位置別高昇り変不変調の状況を観察すると、対象13字は大きく四つの類に分けることができると考えられる：

- A. 多音節語のいずれの位置にあっても、すべて変調して発音される。
- B. 多音節語のいずれの位置にあっても、ほとんど変調して発音される。
- C. 多音節語の各位置にくる名詞字に、変不変調の両様がある。
- D. 位置によって、変不変調の違いが特徴的に異なる。

次ページに、これらのデータを整理して表にした。つづり字は千島式による。

表： 常變調食物名詞字の、多音節名詞における変不変調アンケート調査の結果

凡例： <u>字</u> (二重)は全員が変調 <u>字</u> (一重)は70%以上が変調 <u>字</u> (点線)は変不変の差が小さいもの <u>字</u> (太字)は全員が不変 <u>字</u> (網掛)は70%以上が不変		
類	字 / 原調	(位置) 多音節語 (当該字の変調状況を上記凡例の下線や網掛け, 太字でしめす)
A	橙 chāng <sup>1</sup>	(頭) <u>橙皮</u> <u>橙核</u> <u>橙肉</u> <u>橙樹</u> <u>橙汁</u> <u>橙水</u> <u>橙味</u> <u>橙餅</u> <u>橙醬</u> <u>橙皮醬</u> <u>橙布甸</u> <u>橙蛋糕</u> <u>橙雪糕</u> <u>橙花酒</u> <u>橙花露</u> <u>橙什飲</u> (中) <u>鮮橙汁</u> <u>鮮榨橙汁</u> <u>蜜餞橙皮</u> <u>香橙油</u> (尾) <u>香橙</u> <u>甜橙</u> <u>酸橙</u> <u>厚皮橙</u> <u>柳橙</u> <u>大陸橙</u> <u>台灣橙</u> <u>新會橙</u> <u>金山橙</u> <u>新奇士橙</u>
	柚 yau <sup>6</sup>	(頭) <u>柚子</u> <u>柚皮</u> <u>柚子茶</u> <u>柚子蜜</u> (中) <u>碌柚皮</u> <u>碌柚樹</u> <u>碌柚葉</u> <u>沙田柚皮</u> <u>紋柚皮</u> <u>蝦子柚皮</u> <u>西柚汁</u> (尾) <u>沙田柚</u> <u>碌柚</u> <u>西柚</u> <u>紅柚</u> <u>金柚</u> <u>西施柚</u>
	柿 chi <sup>5</sup>	(頭) <u>柿餅</u> <u>柿肉</u> ; (中) <u>乾柿餅</u> <u>脰柿皮</u> <u>脰柿核</u> <u>脰柿肉</u> (尾) <u>脰柿</u> <u>水柿</u> <u>紅柿</u> <u>富有柿</u> <u>雞心柿</u>
	欖 lām <sup>5</sup>	(頭) <u>欖仁</u> <u>欖油</u> <u>欖核</u> ; (中) <u>橄欖油</u> <u>橄欖樹</u> (尾) <u>鹹欖</u> <u>橄欖</u> <u>白欖</u> <u>青欖</u> <u>水欖</u> <u>黑欖</u> <u>烏欖</u> <u>飛機欖</u> <u>釀水欖</u> <u>甘草欖</u> <u>甘草橄欖</u>
	餡 hām <sup>6</sup>	(頭) <u>餡料</u> <u>餡餅</u> ; (中) <u>豆沙餡包</u> <u>豆沙餡餅</u> <u>鮮肉餡餅</u> (尾) <u>肉餡</u> <u>餅餡</u> <u>釀餡</u> <u>豆沙餡</u> <u>蓮蓉餡</u> <u>麻蓉餡</u> <u>月餅餡</u> <u>雲吞餡</u> <u>鍋貼餡</u> <u>菜肉包餡</u> <u>韭菜餡</u> <u>牛肉餡</u> <u>帶子餡</u>
B	梨 lei <sup>1</sup>	(頭) <u>梨皮</u> <u>梨核</u> <u>梨肉</u> <u>梨樹</u> <u>梨味</u> <u>梨乾</u> <u>梨新地</u> (中) <u>啤梨汁</u> <u>啤梨肉</u> <u>啤梨皮</u> <u>啤梨核</u> <u>啤梨樹</u> <u>啤梨花</u> <u>糖水梨肉</u> <u>雪梨肉</u> <u>雪梨皮</u> <u>雪梨核</u> <u>雪梨汁</u> <u>雪梨乾</u> <u>雪梨樹</u> <u>雪梨花</u> (尾) <u>沙梨</u> <u>啤梨</u> <u>香梨</u> <u>水晶梨</u> <u>鴨嘴梨</u> <u>萊陽梨</u> <u>天津鴨梨</u> <u>蜜梨</u> <u>豐水梨</u> <u>雪梨</u> <u>天津雪梨</u>
	李 lei <sup>5</sup>	(頭) <u>李仔</u> <u>李乾</u> <u>李核</u> <u>李味</u> <u>李樹</u> <u>李肉</u> <u>李皮</u> (中) <u>野李子</u> <u>洋李子</u> ; (尾) <u>南華李</u> <u>桃駁李</u> <u>雞心李</u>
	糴 [粽] zhung <sup>3</sup>	(頭) <u>糴子</u> <u>糴葉</u> ; (中) <u>扎糴繩</u> (尾) <u>裹蒸糴</u> <u>鹹肉糴</u> <u>豆沙糴</u> <u>梘水糴</u> <u>糯米糴</u> <u>紅豆糴</u> <u>綠豆糴</u> <u>蓮蓉糴</u> <u>鮑魚糴</u> <u>佛跳牆糴</u> <u>瑤柱裹蒸糴</u> <u>炸糴</u> <u>迷你糴</u>
	螺 lo <sup>1</sup>	(頭) <u>螺殼</u> <u>螺肉</u> <u>螺頭</u> <u>螺片</u> <u>螺絲粉</u> ; (中) <u>響螺片</u> <u>響螺肉</u> <u>響螺頭</u> (尾) <u>田螺</u> <u>海螺</u> <u>響螺</u> <u>油螺</u> <u>東風螺</u> <u>沙螺</u> <u>角螺</u> <u>釘螺</u> <u>花螺</u>
C	桃 tou <sup>1</sup>	(頭) <u>桃核</u> <u>桃汁</u> <u>桃味</u> <u>桃新地</u> <u>桃片啫喱</u> <u>桃樹</u> <u>桃駁李</u> (中) <u>壽桃仔</u> <u>鮮桃味</u> <u>蜜桃汁</u> <u>水蜜桃肉</u> <u>蜜桃皮</u> <u>水蜜桃皮</u> <u>蜜桃樹</u> <u>水蜜桃樹</u> <u>蟠桃肉</u> (尾) <u>楊桃</u> <u>壽桃</u> <u>蟠桃</u> <u>水蜜桃</u> <u>蜜桃</u>

D	豆 dau <sup>6</sup>	<p>(頭) <u>豆類</u> <u>豆餅</u> <u>豆油</u> <u>豆芽</u> <u>豆苗</u> <u>豆角</u> <u>豆筴</u> <u>豆腐</u> <u>豆腐乾</u> <u>豆腐花</u> <u>豆腐泡</u> <u>豆泡</u> <u>豆腐腦</u> <u>豆粉</u> <u>豆瓣醬</u> <u>豆醬</u> <u>豆豉</u> <u>豆沙</u> <u>豆渣</u> <u>豆腐渣</u> <u>豆奶</u> <u>豆漿</u></p> <p>(中) <u>大豆芽</u> <u>青豆角</u> <u>白豆角</u> <u>白豆粒</u> <u>甜豆醬</u> <u>鹹豆醬</u> <u>青豆蓉</u> <u>青豆蓉湯</u> <u>青豆粥</u> <u>紅豆沙</u> <u>紅豆糕</u> <u>紅豆蓉湯</u> <u>綠豆沙</u> <u>綠豆糕</u> <u>綠豆爽</u> <u>馬豆糕</u> <u>水豆腐</u> <u>油豆腐</u> <u>硬豆腐</u> <u>臭豆腐</u> <u>炸豆腐</u></p> <p>(尾) <u>白豆</u> <u>綠豆</u> <u>紅豆</u> <u>黃豆</u> <u>青豆</u> <u>黑豆</u> <u>烏豆</u> <u>大豆</u> <u>腰豆</u> <u>紅腰豆</u> <u>黃腰豆</u> <u>扁豆</u> <u>黃扁豆</u> <u>黑扁豆</u> <u>紅扁豆</u> <u>蠶豆</u> <u>黃蠶豆</u> <u>白蠶豆</u> <u>邊豆</u> <u>豌豆</u> <u>荷蘭豆</u> <u>四季豆</u> <u>赤小豆</u> <u>毛豆</u> <u>枝豆</u> <u>刀豆</u> <u>眉豆</u> <u>馬豆</u> <u>納豆</u> <u>蘭都豆</u> <u>法國豆</u> <u>蜜糖豆</u> <u>咖啡豆</u> <u>牛油豆</u> <u>甜豆</u> <u>鹹豆</u> <u>焗豆</u></p>
	蛋 dan <sup>6</sup>	<p>(頭) <u>蛋白</u> <u>蛋殼</u> <u>蛋白質</u> <u>蛋黃</u> <u>蛋黃醬</u> <u>蛋糕</u> <u>蛋撻</u> <u>蛋卷</u> <u>蛋饊</u> <u>蛋筒</u> <u>蛋花</u> <u>蛋花湯</u> <u>蛋治</u></p> <p>(中) <u>雞蛋白</u> <u>鹹蛋黃</u> <u>雞蛋黃</u> <u>雞蛋麵</u> <u>雞蛋沙律</u> <u>全蛋麵</u> <u>皮蛋酥</u> <u>雞蛋糕</u> <u>雞蛋撻</u> <u>牛油蛋糕</u> <u>雞蛋卷</u> <u>橙蛋糕</u> <u>雞蛋仔</u></p> <p>(尾) <u>雞蛋</u> <u>鹹蛋</u> <u>皮蛋</u> <u>鹹鴨蛋</u> <u>鴨蛋</u> <u>鵪鶉蛋</u> <u>白鴿蛋</u> <u>鵝蛋</u> <u>龜蛋</u> <u>蛇蛋</u> <u>駝鳥蛋</u> <u>鮮蛋</u> <u>炒蛋</u> <u>煎蛋</u> <u>釀蛋</u> <u>烩蛋</u> <u>燉蛋</u> <u>蒸蛋</u> <u>燻蛋</u> <u>奄列蛋</u> <u>芙蓉蛋</u> <u>炒雞蛋</u> <u>生蛋</u> <u>生雞蛋</u> <u>熟雞蛋</u> <u>半生熟蛋</u> <u>滷水蛋</u> <u>茶葉蛋</u> <u>荷包蛋</u> <u>滾水蛋</u> <u>復活蛋</u> <u>紅雞蛋</u> <u>力康蛋</u></p>
	魚 yü <sup>4</sup>	<p>(頭) <u>魚類</u> <u>魚名</u> <u>魚飯</u> <u>魚湯</u> <u>魚治</u> <u>魚頭</u> <u>魚尾</u> <u>魚身</u> <u>魚皮</u> <u>魚肉</u> <u>魚骨</u> <u>魚血</u> <u>魚鱗</u> <u>魚嘴</u> <u>魚腸</u> <u>魚鰓</u> <u>魚肝</u> <u>魚唇</u> <u>魚鰾</u> <u>魚腩</u> <u>魚春</u> <u>魚子</u> <u>魚卵</u> <u>魚雲</u> <u>魚翅</u> <u>魚肚</u> <u>魚片</u> <u>魚球</u> <u>魚滑</u> <u>魚膠</u> <u>魚蓉</u> <u>魚介汁</u> <u>魚介醬</u> <u>魚露</u> <u>魚子醬</u> <u>魚膠粉</u> <u>魚膠片</u> <u>魚麵</u> <u>魚蓉麵</u> <u>魚粥</u> <u>魚骨粥</u> <u>魚骨湯</u> <u>魚肉湯</u> <u>魚生</u> <u>魚丸</u> <u>魚蛋</u> <u>魚餅</u> <u>魚卷</u> <u>魚批</u> <u>魚柳</u> <u>魚肝油</u> <u>魚油丸</u> <u>魚苗</u> <u>魚餌</u></p> <p>(中) <u>鹹魚仔</u> <u>大魚頭</u> <u>鮠魚尾</u> <u>水魚殼</u> <u>鮫魚肉</u> <u>鮫魚脊</u> <u>鮠魚片</u> <u>三文魚肉</u> <u>鮫魚球</u> <u>墨魚丸</u> <u>魷魚乾</u> <u>魷魚絲</u> <u>章魚乾</u> <u>八爪魚乾</u> <u>鯊魚肝油</u> <u>炆魚頭</u> <u>焗魚腸</u></p> <p>(尾) <u>海魚</u> <u>海水魚</u> <u>淡水魚</u> <u>鹹水魚</u> <u>鮮魚</u> <u>鹹魚</u> <u>大魚</u> <u>鮫魚</u> <u>生魚</u> <u>鮠魚</u> <u>鯉魚</u> <u>鱸魚</u> <u>黃花魚</u> <u>鮠魚</u> <u>鮫魚</u> <u>白飯魚</u> <u>狗棍魚</u> <u>左口魚</u> <u>紅衫魚</u> <u>石斑魚</u> <u>龍脷魚</u> <u>泥鰱魚</u> <u>牛鰱魚</u> <u>泥猛魚</u> <u>烏頭魚</u> <u>火點魚</u> <u>鯖魚</u> <u>鯽魚</u> <u>鱗魚</u> <u>牙帶魚</u> <u>桂花魚</u> <u>木棉魚</u> <u>多春魚</u> <u>沙尖魚</u> <u>倉魚</u> <u>鮫魚</u> <u>撻沙魚</u> <u>劍魚</u> <u>比目魚</u> <u>鳳尾魚</u> <u>銀鱈魚</u> <u>沙甸魚</u> <u>吞拿魚</u> <u>三文魚</u> <u>魷魚</u> <u>水魚</u> <u>墨魚</u> <u>八爪魚</u> <u>章魚</u> <u>鮑魚</u> <u>鮎魚</u> <u>鯊魚</u> <u>鰻魚</u> <u>鱈魚</u> <u>鯊魚</u> <u>鯨魚</u> <u>金魚</u> <u>魔鬼魚</u> <u>雞泡魚</u> <u>美人魚</u> <u>焗魚</u> <u>蒸魚</u> <u>煮魚</u> <u>炸魚</u> <u>燉水魚</u> <u>煙三文魚</u> <u>五柳魚</u></p>
		<p>凡例：字(二重)は全員が変調 字(一重)は70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの 字(太字)は全員が不変 字(網掛)は70%以上が不変</p>

なお、この表は食物と周辺の関係の多音節語のみであるが、当該字でも非食物の多音節語が若干あり、これらについては比較参考のために、各類の分析の後段であついている。



## V. 各類の分析, 検討

上の結果にもとづき, 対象 13 字の変調状況について各類ごとに分析, 検討していく。

A 類: その名詞字が多音節語の頭・中間・後尾のいずれにきても, その名詞字はすべて高昇り変調する。

つぎの 5 字がそれにあたる: 橙 柚 柿 欖 餡

変調にこのような現象が存在するということ自体については, 先行研究でも, それぞれにこのうちいくつかの字をあげて, たとえば袁家驊 1983 (1960 初):190-191 は: 変調が常となっている, 宗福邦 1983: 80 は: 変調がほかならぬ本調である, 曾子凡 1995: 42 は: すでに固定的に変調する, と指摘している。

上の五つの語の共通点は, ほとんど果物とそれに近い縁のある菓子 (この日本語の語源も“菓子”である) 材料で, 日常食生活に関係が深いといえる。香港などでは地理的, 気候的, 流通的にも果物が豊富である。中国料理や中国医学の概念との関係もあって, 食後などに果物を食べる習慣も日本よりも広く, 強い。仮設的なくだもの店のほか, 路上の遊撃的な露店なども多く, 単音節名詞について提起した「日常生活との密着度」という条件を十分そなえたものであり, 近場で産するばあいはなおさらというべきである。このことはいわゆる“familiarity”や Tsou の指摘する“accessibility”と通じるところがあるとおもわれる。

たとえば「橙」(オレンジ) は, 地名を冠した多音節の呼び名例からもわかるように, もともと温暖な広東省の新会などでも産し, 台湾からも入荷し, さらにアメリカから大量輸入されるようになり, (中医の概念でもみかんよりもずっと) 健康に有益だとみなされて, もっとも気軽によく食べられている果物である。

「柚」(ザボン, 文旦の類) は, 同様に広西の沙田にも地名を冠する特産種があり, 台湾でも多く産し, 皮もふくめて料理にもよくつかわれる。

「欖」(オリーブの類) は, 加工品が「話梅」(甘, 酸, 塩味の漬け梅を干したもの) などとともに, いまのこどもたちのキャンディに先立つおやつになってきた, 名実ともに菓子といえるものである。「飛機欖」というのは路上と集合住宅の窓などの間で, そのオリーブ菓子とおかねをおひねり状に包んでなげあっていた物売り法での名詞である。「欖」は広東や台湾など近場でも産する。

「柿」(かき) も近辺, 台湾産などがあり, よく食べられる。香港で多いのは, 日本

凡例: 字(二重)は全員が変調 字(一重)は 70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの  
字(太字)は全員が不変 字(網掛)は 70%以上が不変 調査多音節語の当該字のみ装飾表示

の品種とちがって、中秋節のころ、代表的な果物の一つとしてよく食べられる「臙柿」((ややひらたい) 熟しがき) や、皮をむいたあと水をくぐらせてから食べる「水柿」であったが、近年は「富有柿」なども手にはいり、食べられている。

「餡」(あん) はあずき、まめ類や果物、木の実などからつくられ、中国菓子や点心でも必須のものであることは、いうまでもない。

このように実生活と密着した存在であったため、これらの語は早くから低、最低音域からの変調が常態になり、さらに原調が失われた状態になったことがかんがえられる。

この5字の原調は、知っている人自体がすでに非常に少なくなった。しかし、字によって若干の差もある。

「橙」「柚」「柿」「餡」については、すでにそういう原調の発音をきくことは一般にはなく、知る人はまれである。

しかし、共通的中文の「橄欖」(オリーブ)「橄欖油」(オリーブ・オイル) はとくに書きことばとして意識するときに、また香港の広東語口語ではあまり使われないが、書きことばとして共通的中文の「橄欖球」(ラグビー) の字を読むときには、少数だが「欖」を原調陽上 = 5 声できちんと発音する人もいる。

しかしまた、その字が形状比喩的に、しかも非食物の訳語でつかわれている(とくに香港) 広東語口語の「ラグビー」「欖球」をいうときは変調する。

B 類：その名詞字が多音節語の頭・中間・後尾のいずれにきても、ほとんど変調して発音されるもの。

つぎの4字がそれにあたる： 梨 李 糴[粽] 螺

このうち、「梨」(なし) は「雪梨」以外はすべて高昇り変調し、唯一「雪梨」だけは単独でも、さらに複合名詞となっても、回答者も全員、参照資料もすべて不変であった。例外的不変調の原因として、「雪」には「冷凍冷蔵する」という意味の動詞があるため、意識下で連想される「なし(すでに変調)をひやす」あるいは「冷凍なし」という、動詞目的語あるいは限定語名詞構造などとの同音衝突による混同を避けるためかとも考えられる。「雪梨」は代表的な中国なしの品種であり、このほか、「雪」の字に入声・t があり、現代粵語音では「梨」の字でも l : n を混同することが多いため、オーストラリアの地名「シドニー」の音訳にもこの二字をあててきているが、いずれも不変調である。後者は地名として、果物の「なし」とは関係がないし、さらに中音域の「雪」の字の後は原声調の最低音域のほうが、高昇り変調よりも英語の地名発音

凡例：字(二重)は全員が変調 字(一重)は70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの  
字(太字)は全員が不変 字(網掛)は70%以上が不変 調査多音節語の当該字のみ装飾表示

の音高にずっと近いということもあるだろう。

「李」(すもも)も、上の「梨」とともに、新界、広東、大陸各地や台湾産もあって中国で多食する果物であることは日本でも知られている。いまでは外国産も多い。以前の単音節名詞變調の考察でも、この二つはお互いに原調(「李」陽上=5声と「梨」陽平=4声)のままなら区別できるのに、わざわざ變調による二次的同音衝突をおこすことを恐れず、ともに高昇り變調しているめずらしい例であった。そのさいも日常の食物しかも果物だからこそか、それにしても、と首をかしげたのだった。今回、多音節でも「李肉」「李皮」(すももの果肉と、皮)に2名の不變調があった以外の回答データはすべて變調だった。この2名は実は母娘であるため同様になったのであろうが、例外的不變調の原因はまだ解釈できていない。

「糰[粽]」(ちまき)についても、七十歳代の1名だけを除いてすべてのデータが變調である多音節語がある。この字が後尾にくる「裹蒸糰」「鹹肉糰」「豆沙糰」「瑤柱裹蒸糰」「迷你糰」(それぞれ：肉豆ちまき、塩味肉ちまき、あずきあんちまき、貝柱入り肉ちまき、ミニちまき)で、この1名の男性は變調もありうる(両方可能)という。六、五、四十歳代の協力者では、そういえば自身は變調でいうが、不變もきいたことがあるという人もいる。いまのところ非弁別的に両方可能で併存ということになるが、原調が基本的に失われつつも、年齢が高くなるにしたがってまだ記憶している状況とっていいだろう。時間、世代による変化の具体例といえるであろうが、この種の現象についてはあらためて調査をおこなう必要がある。Tsouの示唆するある種の“diffusional phenomenon”(拡散現象)とも関係するかもしれないが、正確にはどのような条件によるのだろうか。

「螺」(巻き貝)は貝をさすときは、いずれの位置にきても、どんな種類でも100%變調する。

しかし、形状的比喩として非食物につかわれている複合語、たとえば「螺絲」(ねじ)「螺旋」(らせん)や多数あるその複合語「螺絲批」(ねじドライバー)「螺旋槳」(プロペラ)などは不變調、もちろんというべきか「螺絲粉」(巻貝型パスタ)のように再複合で二次的に食物類にもどっても不變調である。こういった点は前出の「糰」とは違っている。

C類：頭と中間、後尾にくる名詞字に變調と不變調の両様があるもの。

この類の字は： 桃

---

凡例：字(二重)は全員が變調 字(一重)は70%以上が變調 字(点線)は變不變の差が小さいもの  
 字(太字)は全員が不變 字(網掛)は70%以上が不變 調査多音節語の当該字のみ裝飾表示

この「桃」の字は状況がやや複雑なので、まず位置別に検討していく。

頭字でも7割以上が変調するのは、すべて意味が食物として‘果物のもも’をさすばあいである。

「桃樹」は変調が6割強とあいまいな場合であるが、調査協力者のなかで、「自分は花が咲く段階なら原調で、果実がなっているときは変調でいうだろう」という興味深い指摘があった。非食物で表にはいれていないが、「桃花」の「桃」の字は不変調である。やはり上の「果実もも」は変調」だから、その桃の実のなる木「桃樹」も変調という意識であろう。

「桃駁李」の頭の「桃」の字は例外的に8割がたが不変とした。これは‘もも’にやや似た‘すもも’の一種であるが、あくまで‘桃のうち’でなく、「李」とみなす意識からだろうか。

後尾字について、データで全員が変調したのは「楊桃」(スターフルーツ)「壽桃」(桃型まんじゅう)である。

逆に、ほとんど不変調であったのは「蟠桃」(仙桃)、やや接近して「水蜜桃」(すいみつとう)、さらに「蜜桃」(みつとう)がこれにつぐ。

じつはこれらはおなじ「桃」でも性格がちがう。

「楊桃」はじつは形状からしても‘もも’の属でなく、断面が星型をした緑～黄色の果物で、外国で‘スター・フルーツ’と呼ばれたりする。内地でも産し、中秋節のころの代表的な果物の一つで、実生活との関係が密接である。

「壽桃」は長寿の概念を象徴するもので、現実生活では桃型のまんじゅうである。

「蟠桃」は伝説中で西王母専用の仙桃、いわば概念的抽象物ともいえる。

「水蜜桃」「蜜桃」は早期にはなかった輸入果実で、以後比較的に高級食品とみなされていたため、これまで実生活との密着度はやや低い。

そうしてみると、この範囲では、やはり変不変調は「実生活との密接な関係性」によるとおもわれるが、Ball, Chao のいう“familiar”, Tsou の言及する“native versus foreign” (原地的対外来的), “common versus abstract” (一般的対抽象的), “accessibility” の概念とも関係するともいえる。

中間字はやや複雑で、変調も不変もあるが、傾向がわかる。

「壽桃仔」(小型桃まんじゅう)は全員変調、「鮮桃味」(フレッシュ・ピーチ味)はあきらかに変調が圧倒的に多く、「蟠桃肉」(仙桃にあやかっつにつくった桃果肉の加工菓子)は逆に不変が圧倒的に多い。

前述の傾向とあわせて考えると、‘食用果実もも’類は変調、「壽桃」はかならず変調、「水蜜桃」、「蜜桃」は変不変がしだいに比較的接近し、「蟠桃」は不変調なのだか

---

凡例：字(二重)は全員が変調 字(一重)は70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの  
 字(太字)は全員が不変 字(網掛)は70%以上が不変 調査多音節語の当該字のみ装飾表示

ら、この範囲で、変不変調はやはり位置の問題よりも、広義の語義的要素、あるいは社会的生活感覚的要素とでもいべきものと関係していることになるのではないか。

なお、上にも記した、果実でない「桃花」や、その「桃花運」(異性運)などの(再)複合語でももちろん不変、「桃李(満門)」「学徒(門に満つ)」といった比喩的、文言的な熟語や成句では、「桃」の字はなおさら不変調である。

D 類：D 類は頭字にすれば、すべて、あるいはほとんど不変調である。

後尾にすれば、逆にすべて、あるいはほとんど変調する。

中間字は変調と不変調が共存している。

つぎの3字がこの類にあたる： 豆 蛋 魚

「豆」(まめ)は頭字にくる場合すべて不変調あるいはほとんど不変調であるが、唯一の例外が「豆類」。これは「豆のたぐい」ということから、「類」は接尾的で、典型的な多音節単語とみなさない考え方もできるだろうが、いずれにしても「まめ」自体を十全にはっきり意識している場合である。他の語彙では、まめを材料としてつくった食べ物や調味料で、原形はもう見えない、あるいはまめの植物の一部であって、粒状の「まめ」それ自体ではない。「豆角」(ささげ、の類)もまめの粒より、さやに注目している。

後尾字においても「馬豆」(黄色小粒でよくデザートにつかうまめ)1語を少数者がなぜか不変とした以外の多音節語の「豆」の字は、すべて回答者全員が変調である。これも位置がちがっても、結局上とおなじ原因かとおもわれ、語彙はほとんど「…豆」で、さまざまな種類のまめ、あるいは「…味のまめ」であり、もともとの粒状の「まめ」という概念が健在していることが一つの鍵になっていると考えられる。

中間字はほとんど変不変調共存状態といってもよいが、例外は「…豆腐」という「豆腐」(頭字でももちろん不変)の(再)複合語で、「豆腐」という古くから熟した名詞のまま、他の語(素)と複合したものである。これらはほとんどすべて、不変である。もの自体についてみると、多く二次の加工を経て、とくに「まめ」の形状はまったく見えず、材料の意識も少なくなって、原料意識に近づいていて、もともとの「まめ」の概念意識が「とうふ」に取って代わられて、上段とはぎゃくに、希薄になっているためであろう。他の語彙はおもにまめを材料としてつくった食べ物で、本来の形がある程度は残っている。このような点は本題全体に通じる傾向の一つでもあるとおもわれる。

「青豆角」「白豆角」は「豆角」(ささげ豆、不変調)の、色を特徴とした種類であるが、「豆」字の不変調が6割ぐらゐで、変調が4割ほどあるのは、「青豆」「白豆」という別の名詞の変調に影響された可能性がある。また「大豆芽」(大豆もやし)と「青

凡例：字(二重)は全員が変調 字(一重)は70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの  
字(太字)は全員が不変 字(網掛)は70%以上が不変 調査多音節語の当該字のみ装飾表示

豆粥」(青豆がゆ)ではともに変調が8割ぐらいで、不変調が2割ほどあるが、これは‘まめ’の形状や概念がより多く残っているためだろうか。

「蛋」(たまご)は頭字のばあい、‘たまご’本体かその部分をいうときは、「蛋黄」(黄はかならず変調)の例外を除いてすべて変調。たとえば、「蛋白」(たまごの白身)「蛋殼」(たまごのから)などである。他方、上記のように原料というべく変化の大きいときは不変、たとえば「蛋糕」(ケーキ)「蛋撻」(エッグ・タルト)「蛋卷」(エッグ・ロールともいうようだが、たまご入り管状菓子)などである。その証左ともいえるようか、「蛋花」「蛋花湯」(溶きたまご、そのスープ)などの場合は、形状こそ変化があるが見慣れた本体中身でもあり、料理の材料でもあり、どちらを意識するかによるようだが、同じ人でも変不変調両方可能とする答えもあった。

後尾字のばあいはすべて変調で、限定語をもっている、各種いずれにしても、被修飾の中心語として、‘たまご’自体であったり、料理の主材料として‘たまご’を十分意識する立場の字である。

中間字のばあいの傾向は、頭字のばあいとかなり似ている。たとえば「雞蛋白」(たまごの白身)では全員変調、「雞蛋糕」(カステラ)では大多数が不変調である。「雞蛋黄」(たまごの黄身)では差が小さいのは上の「蛋黄」と同様である。

「魚」は、頭字のばあい、基本的に不変である。やや異なる語としては「魚湯」(魚スープ)「魚飯」(魚たきこみごはん)「魚治」(ツナ(など魚肉)サンドイッチ)は変不変の人数が拮抗した。「魚類」は変調が3割に、両方可能が1割あり、「魚名」は変調が2割、両方可能が1割あった。このふたつは、まえの「豆類」と同様の問題もあり、たとえばまた日本語で「さかなのたぐい」「さかな／うおの名」といういいかたと「ぎょるい」「ぎょめい」といういいかたがある、多音節単語としての熟し方、かたさ、やわらかさ、語素どうしの結合度とも関係するとおもわれる。

他にもごく少数の異データもあるものの、これらの結果は複合名詞におけるその単字の独立性あるいは原概念の保全性の意識度が大きいばあいは、単音節と同様に(つまりこのばあいは)変調し、それに口頭性と書面性のいわば言文度によっても、それぞれ変調と不変調に分かれることがあることを示しているのではないか。

また、魚が原材料となる加工食品の場合、前述の「豆」「蛋」とおなじ傾向がある。たとえば、「魚露」(魚醬)「魚蓉麵」(魚すり身を練りこんだ麵)「魚餅」(魚すり身を円盤状にのばしたもの)「魚麵」(魚肉をのせた麵)などの例がある。

しかし、魚のからだの一部の場合、「蛋」と違って、不変調がほとんどである。これはどのように解釈すべきか、今後さらに検討する必要がある。‘うお’という生物を意識するときは不変調であるが、‘さかな’という食べ物として意識するときには

凡例：字(二重)は全員が変調 字(一重)は70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの  
字(太字)は全員が不変 字(網掛)は70%以上が不変 調査多音節語の当該字のみ装飾表示

変調するといいきることもできない。たとえば、「魚頭」「魚尾」「魚皮」などは、食べ物として考えるときも不変調であるのは、どうしてだろうか。

後尾字のばあいは、食用魚は基本的に変調する。ただ体型、種類、食用性、生活密着度がかなり大きく異なるものは、別に検討が必要である。

「八爪魚」「章魚」（いずれも、たこ）は約7割が不変調。以前は多食せず、干物をスープに用いたりした。

「墨魚」（もんごういか等肉厚のいかの類）も約半数が不変調。以前はゆでて着色し、かたくなったものが、おやつやおつまみふうになべられる程度であったが、近年、ゆでて刺身ふうや前菜でよく食べられるようになりつつある。

「鮑魚」（あわび）も半数が不変調。やはり干物、かんづめ、冷凍ものが多かったし、以前はたいへん高級な食品として、それほど一般人の生活に密着したものでなかったが、近年状況がかわりつつある。これらはいずれも現在データの5-7割前後が不変であるが、実生活との関係にともなって、変調状況も変化している可能性がある。

一方、「魷魚」（剣先いかのような（厚身でない）いか）はむかしからより常食するためであろうが、前の字が最低音域であることもてつだってか、回答者全員が変調した。

「水魚」（すっぽん）も形状からして魚らしくないのに変調するが、からだによいというので、好んで食べられる傾向があるためか、“水魚之交”など古成語の読みかたとの区別を潜在的にでも意識するからだろうか。

同様に、後尾に「魚」の字がついても魚類とはかぎらない。「美人魚」（にんぎょ）はもちろん一応抽象物で、全員不変調である。「鱺魚」（わに）は輸入した干し肉を滋養スープにすることがあるが、データの半数が不変というのは納得できるというべきだろうか。しかし日本人には意外かもしれないが「鯨魚」（くじら）も半数が不変である。しかも「鯨」の字は最低音域の陽平=4声であり、この最低音域声調がつづく、やや話したり聞いたりしにくくなることは確かにある。以前の純粋な音韻的条件の調査でも低・最低音域声調はより変調率が高かった。にもかかわらず、半数が不変というのは「くじら」は日本とちがって、食用にしない(!)からであろうとかがえられる。

日本式のたべものといえば、「うなぎ」もそのひとつである。「うなぎ」の類でも、本来「白鰻」「黄鰻」（中国うなぎ）などという種類は現地でも炒め煮などで食用してきた。しかし、日本でいう「うなぎ」がそのまま「鰻魚」とよばれ、不変調回答が3割ほどあるのは、日本式かば焼きが近年食用として、日本食とともに広がりは始めているものの、口語名詞としてもまだ定着しつつある過程にあるからかと考えられ、興味ぶかい。

凡例：字(二重)は全員が変調 字(一重)は70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの  
字(太字)は全員が不変 字(網掛)は70%以上が不変 調査多音節語の当該字のみ装飾表示

同様の傾向があると考えられるものは他にもある。「鰻魚」(さめ, ふか)はすでに Tsou によって変調の変化がおきる例としてとりあげられ、以前は恐れられる一方であった‘さめ’が近年は映画や水族園で近しく見られるようになり、不変調から変調に変化したのは“agreeability”と“accessibility”“familiarity”の変化によると考えられると示唆された。ほかに「鰻魚」(たらの類)も一般に食用としてなじみがなかったが、肝油の原料に使われ、しだいに補助栄養食品として身近かに感じるようになっていたための変不変調の小差であるともいえる。

## VI. 結 び

今回、常変調単音節食物名詞字を対象とし、多音節語中での変不変調状況を調査考察したなかで、先行研究ですでに指摘された“familiarity”や“accessibility”などの概念とも関係する点のほか、まずやはりその単字自身の変調傾向が大きくはたらいっていることを確認した。

常変調単音節の果物名詞などに、原調がほとんどまったく伝わっていない、文字通り「常」変調する単字「橙」「柚」「柿」「欖」「餡」があつて、多音節語中の頭・中間・後尾の位置にかかわらず、すべて変調している。

これについて、「梨」「李」「稷[粽]」「螺」も、多音節語中の頭・中間・後尾の位置にかかわらず、ほとんど変調する。少数の不変調は、条件を推論解釈するためのデータが不足しているものもあるが、それ以外は、同音衝突をさけたかとおもわれるもの、現在、変調の過程にあつて、変不変調両方可能あるいは併存とおもわれるもの、原物の形状を比喩的にもちいて他種の物品の名詞としているもの、それに文言的要素のある成句や音訳地名などのばあいである。これらの字ではまだその原調がじゅうぶん意識されている。また、その他の常変調単字でも、その単字の、多音節語中での原概念の保全度が、当該字の変不変調に大きく影響するという認識をえた。

また筆者が当初から疑問をもった諸家のいわば後尾字変調説については、Bauer も「蛋」「豆」を例として疑問を呈したが、変調はやはりその字の位置だけできまるものではないということが明らかになった。単に位置というよりも、むしろ上記の、その食物自身を十全に意識するかどうか、あるいはその原概念を保全するものとして、多様な複合名詞の語構成のなかでのその単字の役割が重要であり、後尾字に変調が比較的多いのはそのあらわれであろう。

つまり、多音節中の語構成で典型的にはその字が限定修飾的にはたらくばあいと被修飾の中心語としてはたらくばあいがあり、後尾にくるときは中心語であることが多く、そのばあい、その食物の原概念が保全されることが多いため、おのずと変調することが多いわけである。

---

凡例：字(二重)は全員が変調 字(一重)は70%以上が変調 字(点線)は変不変の差が小さいもの  
 字(太字)は全員が不変 字(網掛)は70%以上が不変 調査多音節語の当該字のみ装飾表示



しかし、とくにその食物自身を十全に意識するときには、名詞中の頭・中間・後尾の位置にかかわらず、ほとんど、または多く変調する。

逆に単字が材料の一部、さらにそれをも意識しにくい原料になるにしたがい、不変調となる傾向がある。また食物でない意味で、比喩などで使われるばあいも、その単字が本来さすものから拡大して使われているばあいも、多く不変調である。

また、語構成からくる当該字の独立度も原概念の保全につながるため、変調の要因となるとかんがえられる。今回、この原概念の保全度という考え方でたとえばD類の三字「豆」「蛋」「魚」について、多音節名詞の変調状況に対する理解がかなり進んだといえるだろう。しかし、前にも言及したように、「魚」の場合、そのからだの部分さすとき、たとえ食物として意識しても変調しない。このことについては、今後検討する必要がある。

ほかに、文言度も変不変調に大きな影響をあたえる。もともと粵語でも大多数の語彙が漢語系であり、原則として一語素である一漢字は固有の声調をもっていたが、口語としての発展のなかで変調もおこってきたのである。したがって古文、文言はもちろん、書面語を読んだり、成語をいうときにも、原調によるのが大原則で、そのため、書面的なかない語彙、多音節語も不変調でつかわれるのがふつうである。とはいっても、個別的にははじめの五字のように、ほぼ原調が失われているものもある状況である。

今後、この方法を発展させ、食物以外の常変調単音節名詞についても、また本来不変調の単字が多音節語中で変調する状況や、また時間世代差や地域差についても考察をすすめたい。

## &lt;注&gt;

- (0) 本稿の基本的な部分は2005年10月、筑波大学における日本中国語学会大会で報告し、そののち同学会、また本学の先生方からご意見やご助言をいただいた。それによって、下記の注でもより詳細にした部分がある。さらに上神忠彦先生には日本語についてもご助力をいただいた。こゝであわせて感謝申し上げたい。
- (1) 念のため、粵語の声調と高昇り変調について、注記しておきたい：

現代粵語の声調数は伝統的音韻学では九声とされている。これは漢語の伝統的四声：つまり音高パタンの平、上、去声に、内破裂閉鎖韻尾 (-p, -t, -k) のつく入声を加えた四調に、それぞれ陰と陽の二類（高と低の音域にあたる）があり、そのうち陰入がさらに陰入と中入（高音域のなかの高と低、つまり全音域のなかの高と中）に分かれた九つである。

現今では声調を音高ボタンとして記述する立場と教学上の合理性から、入声の高・中・低三調を閉鎖韻尾にかかわらず、音高によって配分し、音韻的に簡素化して、バリエーションをもたせながらも、基本的に計六声とすることが多い。

具体的には、その伝統的九声はそれぞれ、〔伝統調類・（現在の一般的呼称）・低1から高5までの五段階音高調値表示〕の順に並べると：陰平（第1声）53または55、陰上（第2声）35、陰去（第3声）33、陽平（第4声）21または11、陽上（第5声）23、陽去（第6声）22と、陰入（第7=1声）55、中入（第8=3声）33、陽入（第9=6声）22であり、後三者は現今の六声方式ではそれぞれ、等号（=）右の呼称の声調のなかに分属させているわけである。

粵語の語彙には、部分的に先住あるいは周辺の少数民族の言語に起源を求められるとおもわれるものや近代から多くなった英語など外国語の音訳語のほか、地元の口語度の強いものには、動詞等各品詞から擬声擬態語まで、本来の漢字では書けない、また書きにくい非漢字漢語系語彙もかなりある。しかし大部分は古代からあるいはその後使われている漢語系語彙であり、したがって漢字音語彙であって、比較的音韻体系の保存状態のよい粵語ではこれらの語彙は大多数は本来の漢字で書きあらわすことができる。そして漢字には歴史的にきまってきた固有の現代粵語音があり、声調もそれにふくまれる。

語彙の高昇り変調とよぶのは、伝統的音韻学の九声式でいえば、陰平、陰上と陰入の高音域三声調（一般的な現呼称の1、2と7=1声の、三または二調）以外の、中、低音域各調（同3、4、5、6と8=3、9=6声の六または四調）が、語彙によって、高音域の上昇調に変わるものである。変調値は音声的にはさらに高くなるという説もあるものの、音韻的には一般に事実上、陰上35と同じとみなしてよいと考えられるため、いわば部分的な声調交替現象ともいえる。

上述のような変調語は日常生活で頻繁に使用されている。なぜならば、その高昇り変調によって、語義的、また品詞的な変化がもたらされることもあり、それに、なによりも変調語自体が常用名詞に多いためである。

この種の変調の例をあげれば、「錢」という漢字は「價錢」（価格）などという書きことば性のやや高い単語では、原調の陽平（現一般呼称4声）で、単音節名詞の「錢」（おかね）の場合、高音域昇りの陰上（2声）のように発音する。「蛋」の字は「蛋糕」（ケーキ）の場合、原調陽去（6声）のままで発音されるが、単音節（たまご）のときは、陰上（2声）のようになる。二音節でも「蛋白」（卵白）のときはやはり陰上（2声）のように発音する。ほかに単音節の名詞自体でも、たとえば「鴨」（あひる）、「鵝」（がちょう）など、その漢字の本来の声調でも、また陰上（2声）のように発音することもある。しかも「鴨」は変調すると、どちらかといえば、動物としての「あひる」より、食物としてのそれをさすことが多い、といった状況がある。

ことに現実生活では、単音節の名詞が話されるとき、本来の声調から変調するものがたくさんある。その一方では変調しないものもまたずっと多く存在している。このような高昇り変調の現象は学習者の立場から考えると、各漢字＝語素の本来の声調をいくらおぼえたとしても、ある単語でその漢字＝語素は変調するのかしないのか、変調するとすれば、どんなときに、つまりどんな語彙として、またどんな語彙のなかで、どのように使われるときに変調するのか。このことについては本当に理解しにくい。もちろん言語の規則自体の問題として小さくないことがらである。

- (2) 粵語の高昇り変調に関する研究はこれまでも少なくないが、それらは語法的な変調か、または語彙的な変調でも、多音節語の変調を中心に、目立った現象をあつかっているものが大多数である。粵語では共通語とくらべても単音節語がずっと多く使用されるが、これら、より基本的な単音節語の変調を專題、主題とした詳しい分析はほとんどないといってもよく、実際にこの単音節名詞の語彙的な変調についてはわからない部分がまだまだ多い。

従来の多音節を主とした一般的な高昇り変調研究のなかでも、問題の理解をたすける調査や概括的な指摘、個別的説明などはあるが、それらのほかは、おもに単なる習慣によるといわざるをえない現状である。

その先行研究としては、本文で言及したもののほか、たとえば黄錫凌 1983 (1979 修, 1941 初) や、くだって袁家驊 1983 (1961 初)、張洪年 1972, 2000 や饒秉才 歐陽覺亞 周無忌 1981, 1996 は変調について総合的に説明し、うち饒等はさらに原調別に多数の変調語彙をあつめた。宗福邦 1983 や黄大方 1989 等は変調専門文で高昇り変調については、おもに多音節語の例をあつめて、より個別具体的な指摘をした。

黄錫凌 1941: 78-82: 通則として文法的にいえばほぼ名詞類に属し、変調するのはすべて最後の一字であり…、と述べつつ、最後の一字でないばあいの例にも言及し、結局は日常の談話のなかで体得すべきだ、という。

張日昇 1969: 100: ほとんどが連続した後ろの一音節にあらわれて、複合名詞を構成する、という。

黄大方 1989: 90: 多音節の変調ではおもにそれがその連語のなかでの位置によってきまり、たとえば二字からなる組合せでは、後の字の変調するばあいが前の字の変調する状況よりもずっと多い、という。

袁家驊 1983 第2版 (1961 初): 188-191 ほとんどが連続した後ろの音節にあらわれ、偶然に前の音節にあらわれることはあるが少ない、といい、それぞれの例をあげる。

また、「橙」「桃」「梨」「画」など、いくつかの字は変調が常となり、たとえ他の字と連続してもいつも変調でよむ、と指摘している。

宗福邦 1983: 80: 若干の字は単音節でも複音節の語素になっても高昇り調にしかよまない、として、「餡」「轎」「柚」「柿」「茄」「櫻」「橙」をあげ、これは歴史的な変化だが、人々にとっては高昇り調が本調になっている、と指摘した。

曾子凡 1995: 40-42: 習慣的な変調はふつうひろく複音節語あるいは多音節語の最後の一音節(語)にあらわれ、第一あるいは第二音節にあらわれることは少ない、という。

また、「桃」「櫻」などの単音節語は変調でよむのが常である、とも、たとえば「橙」「欖」「蟻」などいくつかの単語は習慣で固定的に変調でよむようになり、原調でよまなくなっている、ともいう。

- (3) Bauer 1997: 232-233 多音節語においては、音節の位置が、その音節が変調するかどうかにかかわらず、最後の音節がひじょうに有利な条件となる。しかし、必ずそうであるともいえない。として、反例に、「橙」は話しことばでは変調でのみあらわれ、「蛋」「豆」などは変不変調を予測することがむずかしい、という。

- (4) 張淑儀 2002a, 2002b, 2004

- (5) 饒秉才等 1981: 282 では、特定の語彙やその類についてではなく、一般化したいいかたで、変調は人によって使用頻度に多少があり、そのため単語によって変不変とも可能という現象ができていて、という。

しかし実際には、すべての名詞字はもちろん、すべての可変調字についても、単に人によって、変調の可不可がきまるというものではない。実際の話しことばでは、ほとんどつねにだれによっても変調するものがあり、そのほかに変調不変調が併存する字もあって、そのなかに弁別的な変調と非弁別的な変調がある。じつはこのなかには原調と変調で弁別をしながらも、それがけっして絶対的でない、という状況もある。ほとんど、ふつう、しばしば、ときには、などと表現せざるをえないような、蓋然性のバリエーションがあって、どのように時により、人によるかといっ

たその条件、分布はかなり複雑である。饒らの上のことばは、おもにここの部分のことをさしているのではないだろうか。いずれにしても、とくに変不変調併存の類については分析記述が簡単ではないが、もちろんすべて無原則で、恣意的というのではないから、よりよい説明を考える必要があるだろう。

- (6) 香港粵語を母語として現地に在住し、口語として平均的にかたまっているとおもわれる四十歳代を中心として、十代から七十代まで各世代男女の調査協力者：十代 {男0, 女1}, 二十代 {男1, 女1}, 三十代 {男2, 女2}, 四十代 {男3, 女6}, 五十代 {男1, 女1}, 六,七十代 {男1, 女1} : 計 {男8, 女12} 合計 20名

このうち六,七十代の男女2名は1940年代に、広州(順徳方面)から来港、その他はほぼ香港生まれ、香港育ち、うち現在広東などによく往来するもの2,3名。

### <主要参考文献>

- 千島英一 1996. (1991 初版) 『標準広東語同音字表』東京：東方書店。
- 張淑儀 2002a. 「香港粵語の単音節名詞における高昇り変調状況の基礎的調査－あわせてその音韻的条件の有無をかんがえる」, 『大阪外国語大学論集』27 : 1－33 頁。
- 張淑儀 2002b. 「香港粵語単音節名詞字の高昇り変調を考える－語義要素と同音衝突から変調規則を探る」, 『中国語学』249 : 89－109 頁。
- 張淑儀 2004. 「香港粵語単音節名詞字の高昇り変調について－語義要素と同音衝突から変調傾向と優先度を再考する」, 『平成13－15年度 科研成果報告書』3 : 29－50 頁。麗澤大学
- 張日昇 1969. 「香港粵語陰平調及變調問題」, 『香港中文大學中國文化研究所學報』2卷1期 81－105 頁。
- 黃錫凌 1983 (1979 修, 1941 初). 『粵音韻彙』香港：中華書局。
- 袁家驊 1983 (1960 初). 『汉语方言概要』北京：文字改革出版社。
- 宗福邦 1983. 「關於广州話字調變讀問題」, 『武漢大學學報』第四期 79－89 頁。
- 黃大方 1989. 「論广州話的變調兼評諸家之說」, 『汕頭大學學報人文科學版』1989 年 第四期 : 89－98 頁。
- 曾子凡 1995. 『廣州話・普通話語詞對比研究』香港：香港普通話研習社。
- 饒秉才 歐陽覺亞 周無忌. 1981, 1996 『廣州話方言詞典』香港 商務印書館。
- Ball, J. Dyer. 1907. *Cantonese Made Easy*, Singapore, Kelly and Walsh Ltd.
- Chao, Y. R. 1969 (1947 First Edition). *Cantonese Primer*, USA, Harvard University Press.
- Tsou, Benjamin K. 1994. 'A note on Cantonese Tone Sandhi (CTS) as a diffusional phenomenon' in *Interdisciplinary Studies on Language and Language Change* 539－549 pp, Taiwan, Pyramid Press.
- Bauer, Robert and Paul Benedict. 1997. *Modern Cantonese Phonology*, New York, Mouton de Gruyter.

### <多音節名詞蒐集主要参考書目>

- 千島英一 2005. 『東方広東語辞典』東京：東方書店。
- 王逢鑫 1997. 『飲食文化詞典』北京：外文出版社。[普通話, 参考用]
- 黎子申 編譯 2002. 『飲食詞典』香港：中流出版社。
- 陳嘉 編著 郝振甫 修訂 2005. 『英漢餐旅名詞彙編』臺北：五洲出版。
- 曾子凡 1995. 『廣州話・普通話語詞對比研究』香港：三聯書店(香港)。
- 曾子凡 1998. 『廣州話・普通話的對比與教學』香港：三聯書店(香港)。
- 曾子凡 2002. 『廣州話・普通話口語詞對譯手冊』香港：三聯書店(香港)。
- 何文匯・朱國藩 2001 (1999 初版). 『粵音正讀字彙』第二版 香港：香港教育圖書公司。

(2006. 10. 16 受理)